



託身と三位一体の栄光

1 「一つの源、一つの根、一つの形が三重に輝いて光を放つ。御父の光あふれる深みから御子の力が突然現われる。全世界を創造した賢慮、御父のみ心から生まれた御子。一つにする聖霊の燃え立つ光。」五世紀の初めにキレネのシネシウスは讃歌の中でこう歌っています。新しい日の幕開けとして聖三位一体、源と三重の栄光の一つである三位一体を祝いました。同等で別個の三つのペルソナである唯一の神についての真理は天国に限られるものではありません。この真理を「天国でしかわからない数学的法則」とみなすべきではありません。三位一体の真理は、哲学者カントが考えるような、人間と無関係なものではないのです。

2 実際、福音史家ルカの記述で見られるように、三位一体の栄光は時間と空間の中に現存し、イエスとその託身と歴史に現われます。ルカはキリストの受胎をまさに三位一体の光の中で説明しています。受胎は天使からマリアへの言葉によって明らかにされました。その言葉はナザレのガリラヤの村にある質素な家で伝えられました。この場所については考古学が明らかにしています。超越的な神の存在が大天使ガブリエルの知らせによってはっきりされました。主である神がマリアを通して、またダビデの子孫として、地上に御子を贈ります。「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になりいと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。」（ルカ1・31～32）

御子を送ることで愛を示す神

3 ここで「御子」という言葉には二重の意味があります。というのも、天の御父との絆と地上の御母との子としての絆はキリストにおいて密接に結び付いているからです。しかし聖霊もまた託身に参与しますが、だからこそ、聖霊の働きによってその受胎が独特で一度限りのものとなるのです。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、

生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」（ルカ1・35）天使の言葉は短い使徒宣言のようであり、それは三位一体の他のペルソナとの関係で関わるキリストの姿を明らかにしてくれます。また、全キリスト者の一致した信仰であり、救いの時が満ち始めた時、ルカがすでに明記しているものです。キリストはいと高き神の御子、偉大で聖、王であり永遠の御方です。神の御子が人となった受胎は、聖霊の力を通して実現しました。そして、ヨハネは第一の手紙で次のように述べます。「御子を認めないものは誰も御父に結ばれていません。御子を公けに言い表わす者は、御父にも結ばれています。」（1ヨハネ2・23）

4 私たちの信仰の中心には託身があり、そこで三位一体の栄光と私たちへの愛が示されました。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」（ヨハネ1・14）「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」（ヨハネ3・16）「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。」（1ヨハネ4・9）

ヨハネが書いた言葉を通してわかることは、託身における三位一体の栄光の出現の仕方は、一瞬暗闇をなくす光のまたたきではなく、世界と人間の心に永遠にまかれた神の生命の種であるということです。

この点において、使徒パウロがガラテヤ人への手紙で語った言葉は象徴的です。「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が『アッバ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実からわかります。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。」（ガラテヤ4・4～7、ローマ8・15～17 参照）ですから御父と御子、聖霊は、託身にお

いて存在し活動しています。そのおかげで、わたしたちは託身した生命に参加することができるのです。第二バチカン公会議は次のように強調しています。「すべての人はキリストとのこの一致へ招かれている。キリストは世の光であって、われわれは彼から出、かれによって生き、彼に向うのである。」(教会憲章3) また、聖チプリアヌスが述べているように、神の子の共同体は、「御父と御子、聖霊の一致によって、人々が一つにするものです。」(「主の祈り」23)

信仰と生命の中心である三位一体

「神を知り御子を知るということは、父と子と聖霊の親密な交わりの神秘を、自分のいのちのうちに受け入れることにほかなりません。人間のいのちは、神のいのちにあずかるがゆえに、今の時点であっても永遠のいのちに開かれているのです。それゆえ、永遠のいのちは神自身のいのちであり、同時に神のいのちです。キリストにおいて、神からわたしたちのもとへ届くこの思いがけない真理、言葉に言い表わしがたい真理を思いめぐらすとき、信仰者は今さ

らながら、驚きと限りない感謝の念を覚えずにはいられません。」(「いのちの福音」37~38)

この驚きの中で秘義を受け入れ、聖三位一体の神秘をあがめなければなりません。聖三位一体は、「キリスト教の信仰と生活の中心的奥義である。それは神そのものの奥義である。ゆえに、この奥義から信仰の他のすべての奥義が生まれ、この奥義がそれらに光を与える。」(「カトリック教会のカテキズム」234)

託身において、イエスに現われる三位一体の愛を黙想します。その愛は光と栄光の完全な輪の中で閉ざされることはありません。三位一体の愛は、人間の体と歴史を照らし充満し、御子における子として私たちに新しい生命を与えます。このため、聖イレネオが言うように、神の栄光は生きる人間なのです。「神の栄光は生きる人間であり、人間の命は神を見ることである。」人間は体を持つからだけではなく、本質的に「人間の生命は神を見ることにある」からなのです。(「異端論駁」IV,20,7)そして、神を見ることは、御子の姿に変えられるということです。「御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。」(1ヨハネ3・2) (2000.4.5)

聖地巡礼ベツレヘムでのごミサ

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。...その名は、『驚くべき指導者、力ある神、

...平和の君』と唱えられる。」(イザヤ9・6)

1 預言者イザヤの言葉は救い主がこの世に来られる前兆を示しています。そして偉大な約束が実現したのはここベツレヘムでした。二千年の間世代を越えて、キリスト者はベツレヘムの名を深い感動と喜びに満ちた感謝の気持ちで宣べ伝えて来ました。私たちも牧者のように、また博士たちのように「布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている」(ルカ2・12)御子を見つけるために来ました。これまでに訪れた巡礼者たちのように、ここで実現された言葉で言い表わすことのできない神秘を前にして、私たちは驚きと崇拜の心でひざまづきます。

使徒ペトロの後継者となって初めての降誕祭で、私の大きな望みは、ベツレヘムのナザレの洞窟で教皇としての仕事を始めることであると皆さんに告げました。(1978年12月24日深夜ミサでの説教3番参照) その時は果たせず、今までその願いをかなえることはできませんでした。しかし今日、憐れみに満ちた神、そのやり方は神秘的でその愛は終わりを知らない神を賛美せずにいることができるでしょうか。この大聖年に救い主がお生まれになった場所へ連れてきてくださった神をたたえずにはいられません。ベツレヘムは私の大聖年巡礼の中心です。これまで辿ってきた道を通してこの場所に導かれ、宣べ伝えられる秘義ご降誕に導かれました。(…)

意義深いことは、神の御子が肉となってお生まれになった場所に教会の普遍性を豊かに示す東方カトリック教会から多くの方々が参加されていることです。神の愛をもって、ギリシア正教会と聖地にある全ての教会共同体の代表の皆さんにあいさついたします。

パレスチナ当局の皆さんが私たちと共に祝い、パレスチナの人々の幸せを願って祈りに参加して下さったことに感謝しています。

2 「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそメシアである。」(ルカ2・10~11)

天使によって告げられた喜びは、過去のことはありません。今日の喜びなのです。全ての時、過去、現在、未来を包む神の救いは永遠に新しいものです。新しい千年期の幕開けにあたって、時間が重要なものであることをもってはっきり知るように求められています。時間の重要性は、ここベツレヘムで神の永遠性が歴史に介入し、永遠に私たちのもとに留まることになったことからわかります。尊者ピードの言葉はこのことをはっきり示しています。「今日でもなお、世の終わりまで毎日、主は絶えずナザレで受胎されベツレヘムでお生まれになるでしょう。」(ルカによる福音

書、注解、2) ベツレヘムでは常に降誕祭ですから、降誕祭の中心地では毎日が降誕祭なのです。また、私たちが毎日求められていることは、ベツレヘムのメッセージ「偉大な喜びの福音」を世界に宣べ伝えることです。「神よりの神、光よりの光」である永遠のみことばは肉となり私たちの間に宿られました。(ヨハネ1・14参照)

生まれたばかりの御子は無力で、マリアとヨセフの愛情に信頼しその保護にまったく頼っていましたが、その御子は地上のこの上ない財産です。御子は私たちの全てなのです。

私たちに与えられた御独り子であるこの御子において、靈魂の憩いと、誤ることのない真実のパンを見い出します。聖体のパンはこの町の名前、「ベツレヘム(パンの家)」さえ予見しています。神は御子にお隠れになり、その栄光は生命のパンの中にお隠れになっています。「パンとぶどう酒の形のもとに、隠れています神よ、つつしんであなたを礼拝します。」

3神が自己を無にするという偉大な神秘。弱さの中に広がる救いの仕事。これは容易な真理ではありません。救い主は、夜、暗闇と静けさの中で、ベツレヘムの洞窟という貧しさの中でお生まれになりました。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」(イザヤ9・1)と預言者イザヤは宣言します。ここは拷問の「くびき」と「むち打ち」を知る場所です。この町々で無垢な叫びが何度聞こえたことでしょうか。救い主が生まれた場所に建てられた大きな教会さえ長年の争いで打ち壊された要塞のように立っています。イエスのまぐさおけは常に十字架の影の中に置かれています。ベツレヘムでの静かで質素な誕生は暗闇とカルワリオでの死の苦しみと共にあるものです。まぐさおけと十字架は同じ救いの愛の秘義です。マリアがまぐさおけに寝かせた御体は、十字架に捧げられた御体と同じものです。

4それならどこに「偉大ななぐさめ主、万能の神、平和の王子」と預言者イザヤが記す者の支配があるのでしょうか。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。」(マタイ28・18)イエスご自身がこのようにお話しになる時、お示しになっている力とは何でしょうか。キリストの国は「この世に属して」(ヨハネ18・36)いません。キリストの国は、人間の歴史を形作る時に現われる力や富、支配が行使される場所ではありません。キリストの力とはむしろ、悪を征服し、罪と死に対して絶対的に勝利するものです。また、被造物の中の創造主のイメージを歪める傷を治す力でもあります。聖霊の栄光、人間同士の平和と神ご自身と一致するという栄光を通して、キリストの力は人間の弱い本性を変え、力を与えます。「自分を受け入れた人、その名を信じる

人々には神の子となる資格を与えた。」(ヨハネ1・12)この言葉は、今日、また永遠にベツレヘムのメッセージです。二千年前に平和の王子がもたらしたこの上なく素晴らしい賜物でもあります。

5そのような平和の内に、パレスチナの歴史の中でこの時が特に重要であることを意識して、パレスチナの皆さんを心からお迎えます。この度終了した司牧会議には全カトリック教会が参加しましたが、この会議によって皆さんが勇気づけられ、一致と平和が強められるようお祈りしています。こうして、皆さんはかつてない信仰の真の証人となり、教会を強め、共通善に仕えることになるでしょう。他の教会や教会共同体のキリスト者の皆さんには、聖なる接吻を送ります。ベツレヘムのイスラム教徒の皆さんにも心から挨拶申し上げ、聖地の人々が理解し協力する新しい時代のためにお祈りします。

今日、私たちは二千年前のある瞬間を見ているが、靈的には全ての時代を抱擁しています。私たちは一つの場所に集まっていますが、地上の全てを取り囲んでいます。また、一人の幼な子を祝っていますが、全ての場所にいる全ての人々を抱擁するので。今日、救い主がお生まれになった場所(かいばおけ広場)から、私たちは大きな声で呼びかけます。全ての時代と場所、全ての人々に「平和が皆さんと共に。恐れなくてください」と大きな声で伝えるのです。この言葉は聖書のページを通して鳴り響きます。神のものであるこの言葉は、死から甦られたイエスご自身がおっしゃったことです。「恐れることはない。」(マタイ28・10)これは今、皆さんへ向けられた教会の言葉です。まさに救い主がお生まれになった場所で、キリスト者としての振る舞いや伝統を守ることを恐れなくてください。

ベツレヘムの洞窟で、今日の第二朗読の聖パウロの言葉、「神の恵みが現われ」(テトス2・11)を使います。お生まれになった御子において、世界は次のことを明らかにしました。「先祖に対する約束は、アブラハムとその子孫に対してもとこしえに。」(1・54~55参照)永遠のみことばが肉となるという神秘に目をくらまされて、全ての恐れを後にして天使のようになり、世にそのような賜物をくださった神を賛美します。天国の聖歌隊と共に、「新しい歌」(詩篇96・1)を歌います。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」(ルカ2・14)

ベツレヘムの御子、マリアの子、神の子、常に主であり平和の王子、「きのうも今日も、また永遠に変わることのない方」(ヘブライ13・8)、私たちが新しい千年期に向かう時、傷を癒し、歩みを強め、私たちの心を神の憐れみの心にかかせてください。「この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れる。(ルカ1・78)アーメン。(2000.3.22)

真のキリスト者、すぐれたジャーナリスト

〔世界中からジャーナリストがローマに集まり、大聖年を祝った。以下は報道機関に従事する人々へ向けられた教皇様のお話。〕

仕事を通してキリストへの扉を開く

1 (・・・) 報道の世界において、今は大きな変化が起こっている時です。科学技術の劇的な発展は、これまでに様々な分野で影響を与えており、程度の差こそあれ人間一人ひとりにも影響を与えています。地球規模的な考え方（グローバリゼーション）は報道機関が支配する力を強めてきましたが、同時に、報道機関はイデオロギーに陥りやすくなったり、また商業的圧力に負けてしまう傾向にもあります。これら全ては報道機関で働く皆さんに、報道の世界に関わるキリスト者として召された意義を自分自身に問い掛けるよう促しています。

(・・・) キリストは「福音」、「良い知らせ」です。キリストは皆さんのような人々、つまり人間が生活するあらゆる所に真理の光を浸透させようと奮闘する人々の模範です。

2 このようなキリストと出会うことが、皆さんがこの数日間に行なったプログラムの目的でした。(・・・)

昨日皆さんは聖パウロの墓を訪れ、今日は聖ペトロの墓に祈りを捧げに来られました。パウロもペトロもキリスト教播藍期に人々に信仰を知らせた偉大な伝達者でした。この二人を思い出すことによって、報道の世界でキリストに従うという明確で具体的な神の呼びかけを思い起こすことができますように。皆さんはその専門職を個人と人間社会の倫理回復及び霊的善のために捧げるよう求められています。

3 これは、倫理的問題の核心であり、皆さんの仕事から切り離すことができないものです。報道の仕事というのは、世論に対して広く直接的に影響を与えるものであり、経済力や利益、党派的な利害だけによって動かされるものであってはなりません。そうではなく、ある意味では、「聖なる」仕事とみなされるべきです。共通善のため、また特に社会で最も弱い立場にいる人々、つまり子供たちや貧しい者、病人

や退けられたり差別される人々の善ために、報道という強力な手段が皆さんに委ねられているのです。

真の教育的貢献を無視し、聴衆を増やすことだけを考えて、執筆したり放送したりしてはいけません。また、個人の権利を考慮に入らずに、見境もなく報道の権利を主張することも許されることではありません。表現の自由を含むどんな自由も絶対的なものではないのです。実際、周りの人々の尊厳や正当な自由を尊重する義務によってそのような自由は制限されています。人々を魅了することであっても、それが真理を損害することになるなら、書いたり作り出したり、放送したりすることはできません。私がここで考えていることは、皆さんが報告する事実の真実性だけでなく、「人についての真理」、すべての面における人間の尊厳についてです。

(・・・)皆さんのそばにいたいと教会が望んでいる印として、数日前、広報評議会は報道倫理の文書を発行しました。この文書は、一致と正義、愛に基づいた社会を築くために自らを捧げるようジャーナリストの皆さんを招くものです。皆さんは人間の生命、またその生命と神との決定的な一致の実現についての真理を伝えることによって人々に仕えることができるのです。(33番参照)(・・・)

忠実な証人であるキリストから目を離さないように

4 兄弟姉妹のみなさん。教会とメディアは人間家族に仕えるため共に歩まなければなりません。そのため私が神に願っていることは、皆さんが真のキリスト者であると共にすぐれたジャーナリストとなり得るという確信をもってこの大聖年の祝いを終えることができるようにということです。メディア社会が必要としているのは真のキリスト者でありすぐれたジャーナリストになるべく毎日全力を尽くす人々です。この大聖年の中心であるイエス・キリスト「証人、誠実な方... 今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(黙示録1・5、8)を見つめ続けるならば、これが実現することでしょう。

皆さんとその多くを要求される厳しい仕事に対して神の助けを願う時、皆さんに心から使徒としての祝福を贈ります。また、皆さんの家族と愛する人々にも喜んで同じ祝福を送ります。(2000.6.4)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

*電話受付時間は火・木曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00となっています。



キリストの母マリア

「カトリック教会のカテキズム(試訳)」より



無原罪の御宿り

490 マリアは、救い主の母となるために、「これほどの任務にふさわしい賜物を神から受けた」(教会憲章56)。天使ガブリエルは、お告げの際に、彼女に「恩恵に満ちたお方」(ルカ1・28)と挨拶した。実際、このお告げに対し信仰の自由な同意を与えることができるためには、彼女が神の恩恵によって完全に所有されている必要があった。

491 何世紀にもわたって教会は「恩恵に満ちた」マリアが受胎の最初の瞬間から神によって贖われていたと考えてきた。これは1854年教皇ピオ九世によって宣言された無原罪の御宿りの教義の教えるところである。

「イエスの功績を考慮して、処女マリアは、全能の神の特別な恩恵と特典によって、その懐胎の最初の瞬間において、原罪のすべての汚れから、前もって保護されていた。」(DS. 2803)

492 マリアを、「懐胎の最初の瞬間から飾った、まったく特別な聖性の輝き」(教会憲章56)は、すべてキリストから受けたものである。実に彼女は、「子の功績が考慮されて崇高な方法で贖われた」(教会憲章53)。御父は、彼女を他のいかなる被造物よりも「キリストにおいて天のあらゆる霊的な祝福で満ちた」(エフェソ1・3)。神は、「天地創造の前に彼女を愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになった」(エフェソ1・4)。

493 東方の教父たちは、神の母を「パナギア(全き聖なるお方)」と呼び、「聖霊によってつくり、新しい被造物に形成された者、あらゆる罪の汚れから免れた者として」褒めたたえる(教会憲章56)。神の恩恵のおかげで、マリアは全生涯にわたっていかなる個人的な罪からも免れていた。

第六段落

マリア。キリストの母、教会の母

963 キリストと聖霊の秘義におけるおとめマリアの役割についてはすでに述べたが、ここでは教会の秘義において聖母がいかなる位置を占めているかを考察するのが適切であると思われる。「マリアは真に神の母、あがない主の母として認められ、称賛されている。・・・さらに、『マリアはまことにキリストの成員の母である。・・・なぜなら、教会のかし

らの成員である信者が、教会の中に生まれるよう愛をもって協力したからである。』(聖アウグスティヌス処女について、6)」(教会憲章53)「・・・マリアは、キリストの母であり、教会の母である。」(パウロ6世、1964年11月21日の説教)

I 教会の母であるマリア

御子との完全な一致

964 教会におけるマリアの役割は、彼女とキリストとの一致と不可分の関係にあり、この一致の直接の結果である。「救いのわざにおける母と子とのこの結合は、キリストが処女マリアの胎内に宿ったときから、その死に至るまで現れている。」(教会憲章57)これはとりわけご受難のときに鮮明に現われる。

こうして聖なる処女も、信仰の旅路を進み、子との一致を十字架にいたるまで忠実に保った。マリアは神の配慮によって十字架のもとに立っていたが、子とともに深く悲しみ、母の心をもってこのいけにえに自分を一致させ、自分から生まれたいけにえの奉獻に心をこめて同意した。そして、十字架の上で死に向かうキリスト・イエスは、「婦人よ、これがあなたの子です」ということばをもって、マリアは母として弟子に与えられた(前掲憲章58)。

965 マリアは御子の昇天の後、「教会の発端を祈りをもって助けた」(前掲憲章69)。使徒と婦人たちとともに集まり、「マリアも、お告げの時すでに自分をおおった聖霊のたまものが与えられるように求めて祈っていた」(前掲憲章59)。

被昇天のときも・・・

966 「最後に、原罪のいかなる汚れにも染まらずに守られていた汚れのない処女は、地上生活の道程を終えて、肉体と靈魂ともども天の栄光に引き上げられ、そして主から、すべてのものの女王として高められた。それは、主たる者の主であり、罪と死の征服者である自分の子に、マリアがよりよく似たものとなるためであった。」(前掲憲章59; 教皇ピオ12世による聖母マリアの被昇天の教義の宣言、1950年: DS. 3903参照) 聖マリアは天に上げられることによって、御子の復活に特別の仕方でも参加し、他のキリスト信者の復活に先んじた。

御子をお生みになったとき処女性を失わず、天に昇られたときこの世をお見捨てにならなかつた神の母よ、あなたは命の泉と一つになられ、生ける神を

宿され、その祈りによって私たちが死から救って下さいます（ビザンチン典礼、被昇天の祝日の聖歌）。

恩恵の世界における我らの母

967 おとめマリアは、御父の御旨と御子の救いの御業と聖霊のすべての靈感に全面的に一致したので、教会にとって信仰と愛徳の模範である。この理由で、「マリアは教会の卓越した全く独特な成員」（教会憲章53）で、「教会の象形（typus）」（前掲憲章63）でさえある。

968 しかし、教会と全人類に関するマリアの役割はさらに遠い範囲にまで及ぶ。「信仰、希望、燃える愛をもって、人々の超自然的生命を回復するために、救い主のわざに全く独自の方法で協力した。このためにマリアは恩恵の世界においてわれわれにとって母であった。」（前掲憲章61）

969 「恩恵の計画におけるマリアの母としてのこの役割は、お告げのときにマリアが忠実に与え、そして十字架のもとでためらうことなく堅持した同意から始まって、選ばれたすべてのものの永遠の完成に至るまで絶えず続くものである。マリアは天にあげられた後も、この救いをもたらす務めを放棄せず、かえって数々の取り次ぎによって、われわれに永遠の救いのたまものを得させるために続けている。・・・それゆえ聖なる処女は、教会において、弁護者、扶助者、救援者、仲介者の称号をもって呼び求められている。」（前掲憲章62）

970 「人々に対する母としてのマリアの役割は、キリストのこの唯一の仲介をけっして曇らせたり減少させたりするものではなく、かえってキリストの仲介の力を示すものである。実に、聖なる処女が人々の救いに対して及ぼす影響はすべて、・・・満ちあふれるキリストの功績から流れ出て、キリストの仲介に基づき、その仲介に全く依存し、その仲介からいっさいの力をくみ取るのである。」（前掲憲章60）「いかなる被造物も受肉したみことば・あがない主と同列に置かれてはならない。しかし、キリストの司祭職に聖職者も信者の民も種々の様式で参与するように、また、神の唯一の善性が被造物に種々の様式で現実に広げられているように、あがない主の唯一の仲介は造られた者が唯一の泉に参与しながら行う種々の協力を拒絶するものではなく、かえってこれを引き起こすのである。」（前掲憲章62）

II 聖マリアへ崇敬

971 「いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう」（ルカ1・48）：「聖母に対する教会の信

心は、キリスト教の典礼における内的な要素となっています。」（教皇パウロ6世使徒的勧告、『聖母マリアへの信心について』57）「マリアが特別な崇敬をもって教会から称えられるのは当然である。確かに聖なる処女は最古の時代から『神の母』という称号のもとに敬われ、信者はあらゆる危険と必要に際して、その保護を祈り求めつつ、そのもとに避難するのである。・・・この崇敬は、全く独自のものはあるが、父と聖霊と受肉したみことばとに捧げられる礼拝とは本質的に異なるものであり、その礼拝に大いに役立つものである。」（教会憲章66）この崇敬は、神の母に捧げられた典礼祝日（典礼憲章103参照）や「福音全体の要約」である聖なるロザリオの祈り（パウロ6世前掲書42）などの聖母に捧げられた祈りによって表される。

III 教会の終末的聖像であるマリア

972 我々はすでに教会そのものと、その起源、使命、目的について見たが、この章を閉じるに当たって、再びマリアに目を向けること以外にふさわしい終わり方はない。なぜなら、彼女の中に「信仰による旅路」という秘義の中にある教会の姿と、この旅路の最後に教会はいかなる姿を取るかを眺めることができるからである。実に、旅路の最後に、教会が主の御母であり自分の母として崇めるお方は、「すべての聖人の交わりのうちに」、「至聖にして不可分の三位一体の栄光」（教会憲章69）のために教会を待っていて下さるのである。

イエスの母は、天上において肉体と靈魂ともどもすでに栄光を受けている者として、来世において完成されるべき教会の像であり始まりであるように、地上においては、主の日がくるまで、旅する神の民にとって確実な希望と慰めのしるしとして輝いている（前掲憲章68）。

要約

973 マリアは、お告げに際し「なれかし」と答え託身の秘義に同意した瞬間に、御子が成し遂げるべき救いの全事業に早くも協力を始めた。彼女は、御子が救い主であり神秘体のかしらであるところではどこでも、母としておられる。

974 聖なるおとめマリアは、この地上での人生を終えると、体と靈魂とともに天の栄光にあげられた。そこでマリアは、御子の復活の栄光に参加し、神秘体のすべての成員の復活を先取りされた。

975 「私たちは、新しいエバであり教会の母である神のいと聖なる御母が、天からもキリストの肢体に対する母としての務めをお続けになることを信じます。」（パウロ6世『神の民のクレド』15）